

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 25 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20720003

研究課題名（和文） 心の哲学と知識の哲学—近代イギリス哲学と現代哲学の比較を手がかりにして

研究課題名（英文） Philosophy of mind and epistemology - a comparison of modern British philosophy and 20th philosophy

研究代表者

戸田 剛文（TODA TAKEFUMI）

京都大学・大学院人間・環境学研究科・准教授

研究者番号：30402746

研究成果の概要（和文）：20世紀において、感覚与件論に始まる基礎づけ主義的な強い知識概念が、ゲティア問題以降、自然主義的な柔軟なものへと変化する過程が、20世紀特有の変化ではなく、17-18世紀にもやはりデカルトからロックなどを経ることで柔軟なものへと変化していることを明らかにし、そのいずれにおいても、その時代の科学の発展が哲学の枠組みに大きな影響を与えていることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In 20th century the fundamentalistic concept of knowledge which was held by sense-datum theorists changed to the more reflexible one through the prosperity of naturalistic epistemology. This research shows that this change occurred in the 17-18th century and this was caused by the development of natural sciences.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	500,000	150,000	650,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
総計	2000,000	600,000	2600,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：認識論、イギリス経験論、自然主義

1. 研究開始当初の背景

これまでは、アイルランドの哲学者ジョージ・バークリの研究を中心に、きんだいイギリス経験論の研究を行ってきた。その際に、デカルトから始まる近代の認識論において、現代哲学でいうところの基礎づけ主義的な認識論から、当時盛んに行われた実験・観察の手法が認識論へと入り込み、いわゆる自然主義的な哲学が起こり始めていることが確認された。そこで、その認識論の変化が、い

かなるものであることを突き止める必要性が感じられた。

2. 研究の目的

20世紀の後半から、哲学をほかの学問分野から独立し、自立したものであると考える立場から、ほかの専門分野、特に自然科学や社会科学などの成果を積極的に取り入れようとする、いわゆる自然主義が盛んになった。自然主義は、「確実性」を強調する強い知識

観をゆうする伝統的な認識論と対比的に、人間の可謬性を積極的に認め、間違いの可能性を認めつつも最前の信念をもつことを目指している。20世紀の前半にラッセルやムーアを中心に展開された感覚与件論が、イギリスの伝統的な経験論的手法を用いながらも、確実性という概念から脱却していない点を考えるとこれは大きな変化であるといえる。しかし、このような変化は、この20世紀特有のものであろうか。すでに、近代イギリス経験論の多くの専門家たちが、この自然主義的な発想を17-18世紀の哲学の中に見いだしている。われわれは、人間の文化的知的遺産たる歴史に目を向け、それによって現代を、あるいは未来を知ろうとすることが多い。特に、哲学においては、長い哲学の歴史の中で永続してきている問題を取り組む際に、先人たちの取り組みを考慮することは、われわれの知の営みというものがいかなるものかを知る上でも重要である。

そこで、本研究においては、近代における知識概念の変化、そして20世紀における知識概念の変化がどのようにしておこっているのかを確認し、それがどのような理由によるものであるのかを明らかにする。そしてそれによって、両者における知識概念の変化の構造にある共通点を示す。

3. 研究の方法

基本的には、オーソドックスな哲学の研究スタイルである文献研究が中心となる。本研究代表者は、本研究課題以前に、イギリス経験論の一人であるジョージ・バークリの研究に従事してきた。バークリは、『視覚新論』などにおいて、距離の知覚がどのようにして成り立つかという問題を論じるなど、現代の心理学的な議論を既に行ってきた。デカルトについてはいうまでもなく、バークリの先駆者たるロックも、当時の科学と密接な関係を持っている。ロックはロバート・ボイルの弟子であり、ボイルが押し進めていた粒子仮説を、自らの認識論のバックグラウンドに取り入れている。こういった彼らの哲学は、後にしばしば不徹底なものであると論じられることになるが、果たしてその批判が正しいものであるのかどうかということは、検討の余地がある。

本研究では、そういった点を明らかにするためにも、当時の哲学者たちが自然科学の影響のもとで重視してきた「実験・観察」の方法、認識論における「知覚」の概念を考察するところから始める。知覚の直接性は、知識の基礎をなすものとして確実性を有し、経験的知識の正当化に役立つものであると考え

られてきた。20世紀になって感覚与件論が生まれてきたのも、そういう考えが背後にあったからである。しかし、直接知覚という概念は、いっけん明白なものに見えても、実際のところ、この概念を用いる哲学者の言葉を見る限り、それほど明瞭なものとは言い難い。

この知覚の問題を端所に、知覚と知識が密接に結びついている近代の認識論の展開を探る。

20世紀の哲学については、自然主義がどのように展開したのかを概観し、知識概念の変遷をまず明らかにする。そして、その変化（そういうものがあるとするならば）、それと近代の認識論の展開の構造を探る。もちろん20世紀の認識論は、非常に多くの考え方が存在するため、そのすべてを詳細に検討することは不可能であろうから、なるべく大局的な流れを追うようにする。

こういった文献的研究だけではなく、この分野の専門家を招へいし、講演会などを企画する。

4. 研究成果

ロックからリードにいたる知識概念の変遷と、心による認識のメカニズムについての考えがどのように変遷していったかを考察することを特に目的とした。そして、そのために、近代のイギリス経験論者において知識獲得のための重要な概念である「知覚」、とりわけ「直接知覚」という概念の変遷を追った。対象を直接に知覚するということは、その言葉だけ見れば、哲学者にかかわらず同じことを指しているとも考えられがちだが、実のところ、ロック、バークリ、リードにおいてさえ、そこには概念の変遷がある。知覚表象説を採用し、心の中の観念を直接知覚の対象とするロック、この枠組みを受け入れながらも、個々の感覚器官に固有の観念のネットワークによって外界認識を論じたバークリ、そして、概念と信念の形成プロセスを知覚としてとらえることで、外界の直接知覚を主張するリード。彼らは、それぞれに独特の議論を展開している。この違いを明らかにしておくことは、近代の認識論の展開をおさえるうえで、重要なものとなる。また、彼らの主張は、心のメカニズムの研究の発展をも示している。この研究では、上述した哲学者の違い明らかにした。そしてこの研究は、近代の知識概念の変遷を見るうえでの基礎となるものである。

さらに、この研究成果を踏まえて、近代における「知識」の概念もまた大きく変貌していることを明らかにした。より詳細にその内容を説明すると、近代哲学の祖デカルトは、

方法的懐疑を利用し、知識の確立を目指したが、彼は、知識には確実性が含まれなければならないという強い知識概念を展開した。その後、いわゆるイギリス経験論として知られているロック、バークリ、ヒューム、そしてスコットランド常識学派の代表者であるリードは、いずれも少なからずデカルトからの影響を受けているが、彼らは、そのそれぞれの認識論的枠組みの中で、デカルトとは違う知識概念を実際には採用しているということが、本研究の指摘するところのものである。さらに、本年度は、認識論への一種の生理学とでも言える議論の導入が、この知識概念の変更を促していることを指摘している。つまり、バークリにおける視覚理論や、トマス・リードにおける感覚と知覚の分離、知覚を感覚が示唆するという心的なメカニズム、このような現代の心理学の基礎と言えるようなものが展開されたとき、それを知識生成の一部とする議論が展開されたとき、知識概念はより緩やかになったということはこの研究では指摘している。本研究は、これを近代における認識論の自然化として描いた。また、まだとりあげられることの少ない連合心理学の祖と呼ばれるデイビッド・ハートリをとりあげ、上記の枠組みの中に位置づけたことも、本研究の重要な成果である。

次に、現代における認識論の変遷を概観し、どのように「知識の概念」が柔軟な物になっていたのかを分析した。20世紀初頭の感覚与件論をはじめとする知識論は、デカルト的な強い知識概念に基づくものであったが、その感覚与件論の挫折と、自然主義的認識論の流行が、知識概念を柔軟なものへと変化させていく様を確認している。自然主義認識論は、いわば哲学と自然科学を連続的な知の営みと見る立場であるが、いわゆる「規範」の問題を巡っていくつかの立場に分類されるのが一般的である。その中でも、クワイン流の「自然化された認識論」は、知識とはどのようなものであるのかという問題よりも、むしろどのようにして知識が生み出されるのかということこそ認識論の使命であると考え、点で、伝統的な認識論と一線を画している。自然主義的認識論者の中にも、このような極端な自然主義を否定する者は多いと考えられているが、20世紀に大きな影響を及ぼした「心の哲学」研究は、このクワイン的な認識論との影響関係も強く、認識論と心の哲学の境界線を曖昧なものとし、これが知識概念の軟化に寄与しているという分析を本研究では行っている。また、このような知識概念の軟化は、行った近代における知識概念の軟化と類似した構造を持つことも明らかにした。

認知科学などの発展とともに広く展開された自然主義的認識論も、その内容は多岐に渡る。特に、自然主義的認識論は、その規範の役割をめぐって、異なる立場のものであると分類されることが多い。特に、(クワインの有名な論文「自然化された認識論」に代表されるような)規範性が最も低いとされる記述的認識論は、知識とは何かという問題を伝統的な認識論ほど重視しないのもであるとも言え、デカルト的な認識論から大きく認識論が変化していることを示している。

23年度は、これらの認識論とは別のアプローチの可能性として、プラグマティズム的な知識概念による認識論の問題解決への試みに着手した。その際、「自由」の概念を例にし、特に現代の自然主義的還元主義とは異なる形での思考方法を提示した。基礎付け主義であろうと自然主義であろうと、「Xとは何か」というと問題形式に対する唯一の答えを与えようとするものであるが、本年度の研究において、その解答に多様性を持たせる多元的な世界観の可能性を提示した。ただし、プラグマティズムにも伝統と多様性があり、その内実それ自体の研究はいまだ十分なものではなく、今後の研究へと引き継がれることになる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① TODA TAKEFUMI, "Change in Twentieth-century Epistemology," *Menschenontologie* 17, 2011, pp. 87-98.
- ② TODA TAKEFUMI, "Transition of the Conception of Knowledge: From Descartes to Reid," *Menschenontologie* 16, 2010, pp. 117-128.
- ③ 戸田剛文, 「直接知覚について一近代のイギリス哲学より」『人間存在論』第15号、2009年、29-39頁。

[学会発表] (計 0件)

〔図書〕（計 1 件）

- ① 戸田剛文、「歴史と哲学」、戸田剛文、松本啓二郎（編）『なぜ哲学史を学ぶのか』（仮題）、京都大学学術出版会、2012年、7月刊行予定（頁数未定）。

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

戸田 剛文 (TODA TAKEFUMI)
京都大学・大学院人間・環境学研究科・准教授
研究者番号：30402746

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：